

# 日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai

二〇一六年(平成二十八年) 四月三〇日  
第一號(通卷第二十九号)



## ●目録

巻頭言

〇二 今こそ中国留学

土田健次郎

〇四 第二屆「先秦兩漢出土文献与學術新視野」

國際研討会参加報告

竹田 健二

〇六 「林謙三先生記念國際シンポジウム

—隋唐音楽と日本雅楽—を開催して

長谷部 剛

山寺 三知

〇八 あえて今更めいたことを書けば

……南京便り

水谷 誠

一〇 国内学会消息(平成二十七年)

一二 委員会報告

論文審査委員会／選挙管理委員会／出版委員会

二三 事務局より

二四 第68回大会開催のお知らせと

研究発表の募集

編集◎九州大学文学部 静永 健

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1

メールアドレス: shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp

発行◎日本中國學會

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内

ファックス: 03-3251-4853

メールアドレス: info@nippon-chugoku-gakkai.org

# 今こそ中国留学

理事  
長  
土田健次郎

昨年暮れに久しぶりにシンポジウムのため北京と上海に行った。近年の北京の大気汚染のひどさは有名だが、その時は意外にも青空が見えていた。往時の無限に抜けるような青さではなく、灰色にわずかに青みがさしているくらいであったが、これでも例外中の例外ということだった。大気汚染の深刻さは中国人も北京在住の日本人もみな口にしていて、私の教え子も北京の大学で教えているが、体調を崩したそうである。上海でも北京ほどではないものの汚染はかなり気にされていた。ここで心配されるのは、大学院生など若手研究者の留学希望者の減少である。実際それはデータ上にも現れている。また大学で中国語を履修する学生が減り、スペイン語履修者数に追い抜かれたりしている。そもそも今日中関係は政治的にぎくしゃくしているし、たまに反日騒ぎも起こる。

私が大学の交換研究員として北京大学にいたのは1985年から1986年にかけてであった。秋などはまさしく「天高気爽」、青空とはかくも青いものかと思ったものである。ちょうど胡耀邦政権期にあたり、買い物も交通も今よりもはるかに不便ではあったが、社会には窓が順次開

け放されていくような開放感が漂っていた。その時はちょうど終戦40周年にあたり、反ファシズム戦争勝利40周年と称して政府が反日キャンペーンを行い、テレビの番組もその手であふれていた。そうしたらそれを受けた学生たちが騒ぎ始め、大学は騒然となった。構内のいたる所に反日の壁新聞が貼られ、今は無き五四運動場では決起集会が開かれた。学生たちが留学生楼に日本人留学生をなぐりに押しかけてくるという噂も立ち、慌てて当時まだ街で売られていた人民服に着替える日本人留学生もいた。ところが学生たちが長安街にデモに出るという動きになった途端、大学は全ての門を閉め、武装警察が大学を取り囲み、一気に沈静化させた。国慶節を機に政府の反日キャンペーンも一気に消えた。もともと胡政権には日中友好的な姿勢があった。

ともかくこの時は高名な現代新儒家の馮友蘭もまだ存命の時代で、住まいの燕南園にたずねていったりした。馮友蘭はちょうど90歳になる時で、生きているうちに香港の中国返還と自著の『中国哲学史新編』の完成を見たいと強い河南訛りで語っていた。馮友蘭は政権に合わせて立場を変え、髭も国が共産化すると剃り開放化するとはやすと言われていたが、当時は髭が有った。今は清華大学の国学研究院の院長をしている陳来氏も当時は講師になりたてであり、北京大学哲学系中国哲学教研室主任の張学智氏も大学院生であった。

出発前に受入教員をあらかじめ申請しておかなければならなかったのも、とりあえず著名な張岱年教授の名を書類に書いておいた。ところが到着した時に、張教授は引退しているから朱伯崑教授に変更するということが告げられた。それでも張教授のお宅には何回もおたずねする機会が持て、中国思想史研究について多岐にわたるお話をうかがえたことは、その温厚で威厳有る風姿とともによい思い出となっている。

朱教授の方は、当時外国人と積極的に接することを好まれない風であり、指導教授なのにほとんど会ったことが無いと言っていた日本人留学生も何人かいた。私も最初は接点が無かったのだが、偶然お会いしてから親しくなり、亡くなるまで御厚誼をかたじけなくした。私の論文を何本も読んでくれて、問題に感じられたところは、「まだ研究の余地が有る」という言われ方をされた。貴

重書室のようなところに台湾で刊行された『四庫全書』の影印が置かれていたが、朱教授はその『易経』関係部分を耽読しておられたようである。それが後に大冊『易学哲学史』全4巻として結実し、朱教授の盛名を一気に高めることになる。しかしそれでも中国では朱教授の評価が真価を反映していないという不満をお弟子は持っていて、朱教授の追悼文の中で、本書の翻訳が伊東倫厚監訳・近藤浩之編・朋友書店出版という形で日本で出版されたことを「日本の中国哲学の学界はやはり見識が有ると認めざるを得まい」と書いている。この翻訳は近藤教授を筆頭に北海道大学の多くの方が関わられた事業であるが、刊行を見ずに没した伊東先生の生前最後のお仕事になり、「監訳者総序」は病床での絶筆となった。ともかくも朱教授は私が北京大学にいた時は哲学系の中でも極めて地味な存在で、学内であまり重んじられているようには見えなかった。朱教授は清華大学の出身で、馮友蘭の助手を務め、馮友蘭とともに北京大学に赴任された方である。

朱教授が当時外国人とあまり接しなかったのは、父上が国民党の要職にあつたとかで特務機関に関わっているとされ、文化大革命の時に迫害を受けてから間が無かったことと関係しているのかもしれない。御家族にも傷痕が残っているということも、朱教授の弟子から聞いたことが有る。次第に親しくなるとその実直な人柄がひとときわ得難いものに思えるようになった。お弟子によると、近くの名も無き山を散策するのが趣味であり、よくお供をしたとか。住居の配分にも文句を言わず、自著の再版の時も最初に約束した無名の出版社を変更しなかったとか。ともかくも中国人のお弟子たちには非常に敬愛されていた。年配の教授連は個々の形で中国現代史の荒波を乗り越えてきていたのであって、その一端を切実に知り得たことも彼の地に行ったからである。

この時私は既に30代半ばに達していた。もっと若ければ更に多くのものを吸収できたかもしれない。当時彼の地はまだ研究環境が整っていなかった。第一研究のための基本書を手に入れることすら難しかった。例えば学生が王陽明を研究しようと思っても、全集はもとより、『伝習録』ですら大陸では出版されていなかった。図書館に有るものは誰かが閲覧しているともう使えない。ある若手が、外部の研究者の妻が北京大学図書館の職員で、その

つてで年中借り出してしまっているの、困っているとこぼしていた。私が帰国して3年後に北京大学から留学してきた院生を台湾の書籍を売っている代々木の東豊書店に案内したところ、大喜びで台湾で出版されていた王陽明の全集だの『明儒学案』だのを購入していた。ともかくも私は研究が盛んな場所に行くというよりも、研究する対象に行くという心持ちだったのが正直なところである。中国出発前には亡き東洋史のある教授から、「土田君は中国に行くのかね、懲役一年みたいなものだね、今じゃ実刑は珍しいよ」と言われたものである。私の大学生から大学院生にかけては文化大革命の最中で、中国に行くことなど生涯ありえないという感じていた。であるから長期滞在でできるだけ心はずんだのである。

政治的経済的な面での日中関係はこれからも山有り谷有りであろう。ただ学問や文化の交流はそれと別個に継続していくことが重要である。今中国は反日的な政治姿勢を取っているが、だからといって日本に行く中国人留学生や日本から来る日本人留学生を制限してはいない。日本思想を研究する優秀な中国人留学生は私のところではむしろ増えている。昨年暮の清華大学の教授たちの話では、日本語履修希望者があまりに多く、授業や教員数がそれに追いつかないので選抜しているそうだが、以前北京大学でも同じことを聞いた。

中国は政治的変動が激しく、留学できることがいつでも保証されているわけではない。今は昔と異なり楽に大陸にも台湾にも留学できるし、受け入れ枠も大きい。私がいた頃と比較して研究環境もはるかに良くなった。今日中関係は摩擦が多いが、歴史的に見ると留学にはむしろ好機と言えるのではなからうか。大気汚染のため呼吸器系に問題の有る人には勧められないのが残念ではあるが。外交とか貿易とかは、政治的経済的状況に直接作用されるが、それに比して研究は比較的その影響から独立した場を確保しやすい。それを活かして学問交流を地道に持続していくことは明日への財産になっていくはずである。

# 第二屆「先秦兩漢出土文獻 与學術新視野」 國際研討會參加報告

島根大学  
竹田 健二

2015年10月17日(土)・  
10月18日(日)の両日、国立  
台湾大学文學院の主催による  
「第二屆「先秦兩漢出土文獻  
与學術新視野」國際研討會」  
が、台湾大学文學院演講庁  
(台北市)において開催された。  
本稿では、海外における出土

文獻研究の状況の一端を紹介するものとして、この國際  
研討會について報告する。

「先秦兩漢出土文獻与學術新視野」というのは、台湾大  
学文學院が立ち上げた共同研究プロジェクトの一つであ  
る。このプロジェクトは、台湾大学文學院の中文系・歴史  
系・哲学系が連携し、経学・史学・思想・文献学・学術史等の  
各方面による研究を総合して先秦兩漢の出土文獻研究に  
取り組み、出土文獻と伝世文獻及び学術史との関係や今  
後の研究の方向性について、改めて検討を加えようとする  
ものである。その目的は、大陸をはじめとする各国の研究  
者との研究交流を積極的に推進し、台湾大学文學院・各系  
がアジア太平洋地域において占めているところの、文化研  
究の拠点としての発言権を向上させることとされている。

プロジェクトの研究組織は、台湾大学中文系から徐富昌  
教授・李隆献教授・葉国良教授・李偉泰教授・李存智教授・  
林宏佳助理教授、哲学系から李賢中教授・佐藤將之教授・  
林明照副教授、歴史系からは呂世浩助理教授、更に学外か

らも中央研究院歴史研究所の顔世鉉研究助理が加わり、  
合計十人で構成されている。プロジェクト全体を統括する  
のは、台湾大学文學院の副院長である徐富昌教授である。

本プロジェクトの研究期間は2011年1月から2015年末  
までの5年間で、プロジェクトの一環として開催された國  
際研討會は今回が2回目である。1回目は2013年6月25  
日・26日に「先秦兩漢出土文獻与學術新視野國際研討會」  
として開催されている。

こうしたプロジェクトが構想された背景には、近年相次  
いだ出土文獻の出現がある。筆者の専門である中国古代  
思想史研究と密接に関わるものだけを見ても、1970年代  
に馬王堆漢墓帛書・銀雀山漢墓・唾虎地秦墓竹簡の出土が  
続き、その後しばらく途絶えたものの、1993年に中国湖北  
省荊門市の郭店一号楚墓から郭店楚簡が出土、翌1994年  
には上海博物館が戦国時代の竹簡(上博楚簡)を購得し、そ  
の後も2007年に湖南大学岳麓書院が秦代の竹簡(岳麓秦  
簡)を、2008年に清華大学が戦国時代の竹簡(清華簡)を、  
2009年に北京大学が漢代の竹簡(北大漢簡)を、更に2010  
年に同じく北京大学が秦代の竹簡(北大秦簡)をと、いずれも  
中国を代表する有名大学が立て続けに出土文獻を入手し  
た。これらの出土文獻の整理作業は既にかなり進んでいる。

このように戦国時代から秦代・漢代の貴重な資料が相次  
いで出現したことを受けて、それらを用いた古代中国に関  
する様々な分野の研究が、世界各国において活発に行わ  
れている。台湾大学文學院のプロジェクトは、まさにそう  
した背景の中で構想されたものと理解される。

本「國際研討會」における研究発表の題目と発表者氏名  
は、以下の通りである。

- 林宏佳「《殷墟花園莊東地甲骨》第59版詞語新釋」
- 張宇衛「甲骨卜辭「寤」字再探及其相關問題」
- 劉國勝「湖北老河口安崗楚簡の初歩整理—兼論由喪葬  
文書看戰國楚地貴族的葬制葬俗」
- 顔世鉉「從居延漢簡的綴合看幾份簡牘文書的復原」
- 王子今「漢塞軍人食鹽定量問題再議—居延《鹽出入簿》  
《廩鹽名籍》研究」
- 林明照「董仲舒哲學中的感應與規範」
- 青山大介「戰國時期伊尹形象的演變—將清華簡伊尹伐  
夏說和《呂氏春秋・慎大》對比」
- 李隆獻「試論《左傳》與《清華簡・貳・繫年》的「戰爭敘事」  
—以邲之戰、鄢陵之戰為例」
- 徐富昌「北大簡《老子》之書體結構及章法特徵」
- 高新華「從出土文獻看對《老子》之「欲」的誤讀」

傅剛「對近年出土文獻釋讀和研究的一點看法」  
李賢中「《戰國縱橫家書》之蘇秦與墨家說服性推理方法之比較」

福田哲之「清華簡〈厚父〉的時代暨其性質」

李存智「周秦至隋詩歌用韻與漢語語音史」

何有祖「里耶秦簡牘釋讀札記（二則）」

陳松長「嶽麓秦簡中的兩條秦二世令文探析」

佐藤將之「中國古代「忠信」論中的〈忠信之道〉的思想定位」

竹田健二「清華簡〈湯在啻門〉的「氣」」

湯淺邦弘「清華簡〈殷高宗問於三壽〉的思想特色」

葉國良「歷代朝廷祀典擇日不受日書影響論」

常森「基於出土文獻省察《大學》格致學說」

廖名春「郭店簡《魯穆公》篇「恆稱」新證」

題目から見て取れるように、各発表が取り上げる出土文献は、甲骨文から戦国期の郭店楚簡・清華簡、秦代の里耶秦簡・岳麓秦簡、漢代の居延漢簡・馬王堆帛書・北大漢簡と実に様々であり、またその研究の内容も歴史学・文学・哲学と幅広い。全体として台湾大学文学院のプロジェクトの趣旨によく合致する国際研究会であったと見てよからう。

発表者は、台湾の大学に勤める研究者が全体の半数であり、他に大陸の大学から参加した研究者が8名、日本からは中国出土文献研究会の湯浅邦弘（大阪大学大学院教授）・福田哲之（島根大学教育学部教授）・筆者の3名（日本人は他に、台湾の大学に所属する2名）であった。欧米の大学からの参加者はいなかった。

実は筆者は、2013年の3月から8月まで台湾奨助金を得て台湾大学哲学系に訪問学者として滞在しており、その間に開催された1回目の「国際研究会」にも発表者の一人として参加した。この時の研究会も規模は今回とほぼ同

じであったが、アメリカの大学から参加した発表者が1名、大陸からの参加者が4名、日本から参加したのが3名（谷中信一日本女子大学教授・湯浅教授・筆者）であった。今回欧米からの参加者がいなかった点は国際学会としていささか寂しいように感じられたが、大陸からの参加者が倍増した点は、学术交流における大陸と台湾との結びつきが近年一層強まったことを示しているように思われた。

今回の国際研究会を通して、筆者は改めて研究の国際化の重要性を痛感した。もとより研究の国際化は、以前から多くの先人が取り組んでこられたわけだが、新たな資料の出現が続く出土文献の研究においては、台湾大学文学院のように国際的な学术交流を特に重視し、国際学会などを積極的に開催するところが増えている。国際的な学术交流に取り組み、積極的に情報の収集や発信を行うことは、先端的な研究を進める上で不可欠であることを改めて感じた次第である。

そうした意味で、今回の研究会の中で『清華大学藏戰国竹簡（五）』（中西書局、2015年4月）所収の資料に関する発表が、日本から参加した中国出土文献研究会の3人だけであったことは、日本における出土文献研究のアピールとなったように思う。

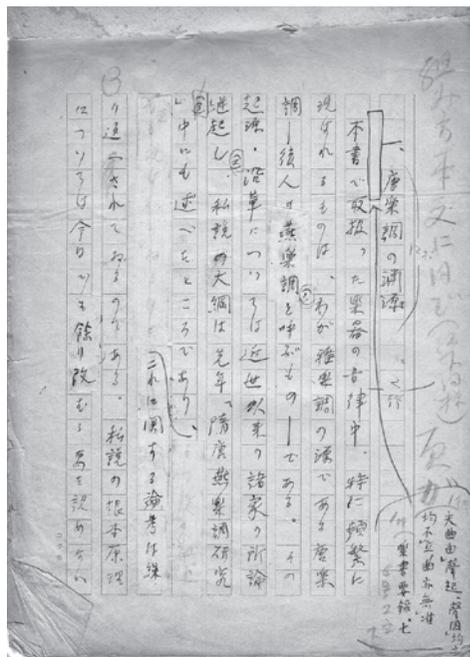
国際的な学术交流を行うことの意義は今後一層大きくなるように思われるのだが、甚だ興味深かったのは、台湾大学哲学系の佐藤將之教授の参加方法である。佐藤教授は台湾大学文学院のプロジェクトのメンバーで、発表者の一人であったのだが、研究会当日は東京大学の訪問学者として日本に滞在中であった。このため、佐藤教授は研究会にスカイプを利用して参加したのである。後日佐藤教授から伺ったところでは、質疑応答の際に会場の様子が把握しづらく、誰が質問しているのかが分かりにくかった点は否めないが、それ以外には特に支障は無かったとのことである。国際学会への参加がテレビ会議のような形となる日も遠くないのかもしれない。



『唐五代北宋篇一』(1976)などごく少数である。同書は全九章と附論からなり、第一章から第九章までは唐代の音律「(雅楽の)正律」「俗律」「清商律」のうち「俗律」が亀茲(キジル)楽の音律から生まれたことを出発点にして唐玄宗皇帝期までの音楽、特に「俗楽」=「燕楽」の実態について詳細な考察を加え、「附論」ではそしてそれが日本に伝来して「雅楽」を形成した過程での、その「雅楽」の調や音位まで復元を試みている。

北周、武帝(543~578在位)のとき亀茲から来朝した楽人、蘇祇婆がインド起源の七調の楽理を伝える。隋の学者、鄭訳は開皇二(582)年に雅楽の制定の際に、蘇祇婆の七調を、中国の「宮」に始まる七音、および「黄鍾」に始まる十二律に適応させた八十四調の理論を提出する。理論的には八十四調あるうち、唐代には二十八調が「俗楽」=「燕楽」に用いられるようになり「燕楽二十八調」が成立する。『隋唐燕楽調研究』はこの「燕楽二十八調」が亀茲楽に基づいていること指摘し、さらに個別にその由来と後世の変化、雅楽や清商楽などほかの調・音律との対応関係を論じ、最終的には音高の推定まで行っている。

長谷部・山寺を含め「六朝楽府の会」メンバーは必要に応じて同書を日本語訳しつつ『隋書』音楽志の訳注稿を作成



今回発見された林謙三の未発表原稿「唐楽調の淵源」

# 「林謙三先生記念 国際シンポジウム —隋唐音楽と日本雅楽—」 を開催して

関西大学  
長谷部 剛  
山寺 三知  
國學院大學北海道短期大学部

はなしは2002年まで遡る。長谷部は、釜谷武志・神戸大学教授を研究代表者とする科研・基盤研究(B)「六朝の楽府と楽府詩」の研究分担者として『宋書』楽志の訳注作業に参加した。この研究は2006年の佐藤大志・広島大学准教授を研究

代表者とする科研・基盤(B)「南北朝楽府の多角的研究」へと発展、「六朝楽府の会」が組織され、長谷部・山寺の二名も加わって『隋書』音楽志の訳注作業を行った(この成果は、2016年2月に和泉書院より『隋書』音楽志訳注』として公刊された)。

この『隋書』音楽志訳注作業の際、最も重要であったのが林謙三(1899~1976)著・郭沫若訳の『隋唐燕楽調研究』である。同書は、日本亡命中の郭沫若が、甲骨文字の研究資料を求めて訪れた東京、東洋文庫で林謙三と交友を結び、その縁で林の研究を郭が中国語訳し1936年上海の商務印書館より出版したものである。中国では郭沫若訳の中国語版があるために隋唐音楽研究、および音楽に関連する文学の領域で同書は必読の著と見なされていると言っても過言ではないが、日本での認識は中国ほど高くはない。日本の中国文学研究の領域でも同書を積極的に活用しているのは、管見の限りでいえば村上哲見『宋詞研究

したが、もとは日本語で書かれた著作であるにもかかわらず日本語版のないことを恨み無しとはしなかった。専門性が極めて高く、しかもこの研究領域では先駆的で独創的な研究であるために、内容・文辞の両面で難解な中国語訳でどれほど原著者の意図が尽くされているか、不明であったからである。

折しも林謙三のご遺族のご厚意により林謙三旧蔵書・旧稿を調査する機会に恵まれ、2010年12月以降、複数回にわたり、佐藤・長谷部・山寺と狩野雄(相模女子大学)が奈良の林謙三旧邸を訪問した。林謙三旧邸調査の結果、大部の未発表原稿を発見し、そのなかには「唐楽調の淵源」と題する原稿があった。表紙に『東亜楽器考』附録 富山房とあり、「唐楽調の淵源」は、1942年富山房より出版を計画するものの実現せぬまま終戦を迎え出版計画は途絶した『東亜楽器考』の附録として収められるはずであった論文であることがわかった。『東亜楽器考』は後年『東アジア楽器考』(1973)として出版されたが、1973年版には「唐楽調の淵源」は収められていない。同論文の内容を関するに『隋唐燕楽調研究』と重なるところが多く、このことから中国語版『隋唐燕楽調研究』の出版後、林謙三みずから同書の日本語版を執筆していたことがわかる。前述したように同書は先駆的な研究であり、発表後の補訂や修正が必要な箇所もあったはずである。「唐楽調の淵源」はそれがなされていることになり、『隋唐燕楽調研究』とペアで公開され研究者に活用されるべきものと私たちは判断している。ただし、分量的に『隋唐燕楽調研究』の全部に対応しているわけではなく、カバーできない部分は中国語版を日本語訳し、それと「唐楽調の淵源」の解説・翻刻作業によって

『隋唐燕楽調研究』の全貌を新しくよみがえらせることが可能であると考えている。

林謙三旧邸における「唐楽調の淵源」の発見を契機として、私たちは林の遺した東アジア音楽研究資料を整理・研究することの必要性を強く認識し、2012年より長谷部を研究代表者として科研・基盤研究(B)「隋唐楽府文学の総合的研究」を組織し、『旧唐書』音楽志の訳注作業を進めると同時にこの研究課題の遂行に着手した。この過程でご遺族は林謙三の蔵書および未発表原稿等を関西大学に寄贈する意思を表明された。これを記念して開催したのが「林謙三先生記念国際シンポジウム—隋唐音楽と日本雅楽—」である(2014年10月26日、関西大学アジア文化研究センター)。

この催しは第一部講演会、第二部雅楽演奏会の二部構成を取った。第一部では、陳応時・上海音楽学院教授に「『隋唐燕楽調研究』の独創性」と題して、沈冬・国立台湾大学音楽学研究所教授に「林謙三の東アジア音楽研究」と題して、それぞれ講演をしていただいた。第二部の雅楽演奏会では、『平安朝の雅楽—古楽譜による唐楽曲の楽理的な研究』(2005)の著者、遠藤徹・東京学芸大学教授に構成・解説を、雅楽演奏を伶楽舎に依頼した。演奏会のプログラムは以下の通り。

1. 平調 三台塩急
2. 琵琶独奏 黄鐘調手弾(『南宮琵琶譜』より)
3. 双調 柳花苑(仲呂均商調の音律に基づく推定復元)
4. 箏独奏 双調撮合(『仁智要録』より)
5. 黄鐘調 皇帝三台(『博雅笛譜』より、雅楽寮の楽器編成による推定復元)

これらの日本雅楽曲の復元は、林謙三がその端緒をつけたもので、今回、遠藤教授の修正・補足を経て伶楽舎の演奏によって参加者の前に実際に立ち現れたのである。

上段で『隋唐燕楽調研究』の日本語訳について言及した。私たちは、郭沫若の中国語訳を日本語に再翻訳して『隋唐燕楽調研究』の原貌を明らかにしたいと考えている。その際には、今回のシンポジウムで講演していただいた陳応時教授の解説を加え、さらに私たちによって発見された未発表原稿「唐楽調の淵源」を翻字し附録として収める予定である。すでに原著者・林謙三の、翻訳者・郭沫若の、それぞれ著作権継承者であるご遺族の許可を得ており、2016年度中の公刊を準備している。



伶楽舎の雅楽演奏

# あえて今更めいたことを 書けば……南京便り

創価大学  
水谷 誠

をあきれさせ怒らすことになるので、改めて別のテーマで書くことにします。

多くの先生がこの場で学術交流を述べています。しかし、そのことをこの場で書くことはできない。なぜなら、私の関係する学会が大変なことになっている。この夏に安徽大学で国際シンポを開催することになっているが、恐らく運営は綱渡りだと思う。その騒動の詳細を書けば、ここで読者の目にとまることでしょう。おもしろく読んでいただけと思う。しかし、このことが先方に知れ渡ったら、私がとても困ることになる。騒動自体、とても中国的でおもしろいといえます。しかし、これを書くわけにはいかない。そうすると、書くことは実質なくなってしまう。この欄に穴を開けるわけに行きませんので、「埋め草」めいたことを書きます。ですから、読み飛ばしてください。

## 二

前置きが長くなりました。本題に入りたいと思います。現在、私は南京理工大学外国語学院の国際顧問教授をしています。2015年夏から向こう三年間二ヶ月ほど授業をしています。いわば二足のわらじを履いていることになっています。中国滞在中、仕事もありますが、雑用自体はとて少ないので、暇を見つけてはあちこち足を伸ばしています。こんなことをしているうちに、一つのことを気がつきました。私のような抽象度の高い分野を研究していると、言語化されたものがすべてであるような気がしてきました。抽象化される時にそぎ落とされた部分がどれほどのものか、ほとんど顧慮されずにいます。しかし、最近ではマズいのではないかと、内心思っています。それは、こんなことがあったからです。

昨年、植木久行編『中国詩跡事典』(研文出版)が出ました。これは、松浦友久晩年の受講生たちが集まって完成させたものです。大変立派にできたので、私はこれを喜んで読み出しました。途中まで至ると、あることに気がつきました。それは、その担当詩跡に執筆者が行ったことがあるのかどうか、文面からうすうすわかるということです。別に「私はここに行きました」とか「行ってません」とかは、どの項目でもひと言も触れてません。基本的に過不足なく書けば良いわけですが、しかし、書かれたところから、うっすらと行った時の雰囲気伝わってきます。その時、研究者として自分の対象としている関連地域の空気を吸っているということの重要さに遅まきながら気がつきました。もちろん、さまざまな制約から、必ず行かなければならないというわけではありません。できるならということです。そうすることによって、自分の研究に興行きができるということです。

## 三

今から6年ほど前に、白居易が母のために服喪した地である陝西省渭南市下邽に行ってきました。白居易詩の下邽滞在時のイメージがあまり明確に結ばなかったからです。もちろん、私の理解力不足もあると思います。それなら何回も読み込むよりもいっそ現地を見てこようと思いました。現地に行って驚いたのは、見渡す限りの平野で、縦横無尽に灌漑水路が走っていることでした。その時、私は、白居易の経営的才能が突出していると思いました。彼が現

代に生まれていたら、文化的素養を持った大富豪になったことでしょう。当時、人気のあったのは、終南山山麓の風光明媚なところでした。ここを荘園にして、そこでの農産物の上がりを収入にしました。しかし、山麓は灌漑が難しく、収入が一定になりません。これに対し、下邳は、目を引くような景色はありませんが、鄭渠以来の水路があります。天候に左右されずに安定した収入を得ることができます。水さえ有れば、連作ができるからです。白居易の経済・経営のセンスは、たいしたものですが、このようなことは、多くの白居易関連書籍に書いてありません。有能な経営者である白居易は、そんなことおくびにも出しません。だから、気がつかなかった。彼はなかなか上手です。千二百年にわたって、それを隠すのですから。

次に、疑問に思っていたので、わざわざ出かけたことがあります。中文に入って、入矢義高『寒山』(中国詩人選)を読みました。「この部分は読めない」という箇所が出てくるので、とても強い印象を持ちました。他のシリーズは、こうしたほとんど記述がありません。しかし、『寒山』にはいくつか出てくる。そんなきっかけで寒山に興味を持ちました。そして、天台山に行きました。その時、おやと思いました。寒山詩に出てくる洞窟が、天台山にないからです。現地で地図を求めましたが、そんなものはありませんでした。たまたま、赤城山の入場券に「寒岩」という地域があることが記されていました。その時は、そこに行く余裕はありませんでしたので、次回に立ち寄ってみようということにしました。そして、4年前に天台に行きました。県の中心から西に一時間ほどいったところに、寒山の居たとされる明岩洞寺に行きました。ここは、寺の名前に「洞」があることからわかるように、洞窟がそこいら中にあります。私の印象では、寒山詩で洞窟の持つモチーフはとても重要です。ここでの洞窟をみて、なんとか納得がいきました。たとえ、ここでなくとも寒山に洞窟がなくてはならない。後は岩山、木々が茂り、前が川という風景です。

もっともうまくいった例ばかりでない。むしろ、失敗例の方が多。こうした幻想や自己満足がほとんどじゃないかといわれても、抗弁の余地はないといえます。ただし、こうしたことは研究論文で言語化する範囲からズレていますので、大きな実害はないと確信しています。そこで、失敗例を挙げましょう。そうでないと説得力がありません。襄

陽で、羊祜の「墮淚碑」跡(もちろん近世にあったもの)を探しました。岷山にあったというので、岷山の麓に行きました。ところが、岷山は大きい。どこから登るのか、それさえも見当がつかみません。結局、岷山付近での一番のランドマークである習家池から、岷山の写真を幾枚か撮って帰ってきました。一昨年、改めて襄陽に行き、地元の郷土史家から、鉄道建設で壊された「墮淚碑」跡と羊祜・杜預廟跡が荊州に行く道ばたにあったことを聞きました。山ばかりみましたが、あったのは自分の背の方角でした。しかも、すぐそこでした。

最近、足場が南京にできたことで、近くに足をのばしています。この前は、安徽の滁州と和県に行ってきました。滁州市の町に入りますと、山は西の瑯琊山しか見えません。「醉翁亭記」を読みますと、滁州市の町は、周囲を山に囲まれているというが、とんでもない。西にしか山がない。虚構にコロッと騙されていました。山も低い。ゆっくり登っていくと、醉翁亭に着きます。私でさえ息切れがしない。すっかり欧陽脩の名文に乗せられていたことがわかりました。その巧みさに感心します。

その帰り道、和県の「西楚霸王廟」に行きました。ここに着く手前に烏江が流れています。この川が安徽と江蘇の省境になっています。司馬遷も会稽山に行く途中にここに立ち寄っています。南京からのあまりの近さに驚きました。今は、大気汚染で南京の町は見えませんが、秦代でしたら、晴れば紫金山が見えたでしょう。それがわかると、あの烏江亭長の言葉の重みが良く理解できました。

#### 四

こうやって反省的に実地の経験を見てみると、自分の専門である音韻学関係の地に行っていない。たとえば、江永や戴震の徽州の地に行っていない。黄山や徽州が世界遺産に登録され人がひしめいている。別にそこと重複しないのだけれども、高い宿賃で気が重たい。また、南京から茅山を越えた金壇の地にも行ってない。私の悪い癖で、「灯台も暗し」となっている。なんとか東に西にと行かなくては。ぼやぼやしていると、南京理工大の任期も切れる。どうも、自分の研究では、上に述べたことが一番おろそかのようです。

# ❖ 国内学会消息 (平成二十七年)

## 北海道中国哲學會

○例会

5月29日

・中井竹山『非徴』について(續) 王 天波

6月26日

・中国における日本思想史研究の現状 武石 智典

7月18日 中国出土資料學會平成27年度第1回例会

(北海道中国哲學會協賛・共催)

於北海道大學人文・社會科學総合教育研究棟W308室

・西周青銅器銘文からみた祭祀行為の變容 角道 亮介

・郭店楚簡『太一生水』の思想 西 信康

・清華簡『殷高宗問於三壽』研究

中國人民大學哲學院教授 曹 峰

11月6日

・命運の相違—恵棟と徂徠の荀子注— 林 則堯

12月4日

・「田中穰氏旧蔵典籍古文書」中の『周易』について  
近藤 浩之

○研究發表大會

第45回研究發表大會竝總會 8月30日

於北海道大學人文・社會科學総合教育研究棟W517室

・『蒙求』における教育観 張 斌

・中江藤樹についての研究—『翁問答』を中心に—  
石 海濤

・徂徠諸子學の一側面 林 則堯

・北宋士大夫の性説—經書解釋を中心に— 加藤 眞司

・洗心洞割記の太虚説 山際 明利  
(近藤 浩之 記)

## 北海道大學中國語・中國文學談話會

第248回 2月21日[卒業論文報告會]

・『太平廣記』における「金精」と「木精」について  
西原 一壘

第249回 3月14日

・最後の授業—日本映畫のなかの中國人— 野澤 俊敬

第250回 8月10日

・「無聲の中國」：一九三〇年代の中國映畫におけるネー

ジョン・ジェンダーと聲の主體性 孫 柏

○刊行物

『饕餮』第23號(9月)

『火輪』第36號(9月)

『連環畫研究』第4號(2月)

(藤井 得弘 記)

## 秋田中国学会

平成27年度春季第160回例会 5月23日(土)

於秋田大学教育文化学部3号館3階3-343教室

・漢語方言「倒話」と少数民族語 杉田 泰史

・李白—參軍時の情況と詩の特色 高橋彰三郎

平成27年度秋季第161回例会 11月28日(土)

於秋田大学教育文化学部3号館3階3-344教室

・辺塞詩人岑参の鳳翔行在所時期の動向と心情(杜甫との比較)—「玉門関蓋將軍歌」をめぐる— 鈴木長十郎

・「原左氏伝」及び「春秋左氏経」の曆法と三正論  
吉永慎二郎

(羽田 朝子 記)

## 東北中国学会

第64回大会 於東北大学

第一日(5月30日)

・戦国秦の国境を越えた人びと—岳麓秦簡に見える「邦亡」「婦義」「降」を中心に— 渡邊 英幸

・書簡は如何にして届けられたか—張潮と北京の文人との伝達を手がかりに— 小塚 由博

[公開講演]

・琉球漢詩の世界—程順則を中心に— 上里 賢一  
第二日(5月31日、中国思想・中国文学分野のみ抜粋)

・『詩経』鄭風「子衿」篇の解釈をめぐる 高崎 駿士

・『楚辞』「招魂」・「大招」に見える他篇との類似表現  
田島 花野

・呉筠「玄綱論」上篇について 劉 暁春

・『祖堂集』における「亭前栢樹子」問答について  
祝 釗

・黄州左遷期の蘇軾について  
室 貴明

- 『詳刑公案』における訟師秘本からの影響について  
堀川 慎吾
- 穆時英「斷了條絡膊の人」論—反復される切断の表象に着目して—  
福長 悠  
(尾崎順一郎・田島 花野 記)

## 東北シナ学会例会

2月例会 2月12日・13日

(中国思想・中国文学分野のみ抜粋)

[卒業論文発表会]

- 李白と王維の詩における「白」と「素」 阿部江莉子
- 章炳麟『齊物論釈』の天籟寓話について 新目 知博
- 英文学の中国語翻訳について—『シャーロックホームズ』を題材に 青柳 杏奈
- 『大江大海一九四九』から考える台湾のアイデンティティ 渡邊 千晶

[修士論文発表会]

- 『詩経』研究—衣の表象性について 高崎 駿士
- 五代宋禅籍思想研究—「亭前栢樹子」問答を中心として—  
祝 釗
- 蘇軾文学研究 室 貴明
- 穆時英研究 福長 悠
- 現代中国語の「同格」の研究 中村 直矢

4月例会 4月25日 [新入生歓迎会]

- 九世紀以前の中国「女流」文学 佐竹 保子  
(尾崎順一郎・田島 花野 記)

## 東北大学中国哲学読書会

第181回 10月30日 [卒業論文構想発表会]

- 『莊子』の至人観—内篇を中心に— 藤井 一成

第182回 11月18日 [卒業論文構想発表会]

- 『墨子』の思想について 中島 麻那  
(尾崎順一郎 記)

## 東北大学中国文学談話会

第1回中国文学談話会 4月6日 [卒業論文雑誌会]

- 鈴木一成氏「李白と酒」について 木村 崇志
- 森中美樹氏『『紅樓夢』中の花の役割—第三十七回の「海棠詩社」における「白海棠」—について 菅 悠理子
- 寺田守氏「教材解釈に内包される学習者像の検討—「故

- 郷(魯迅)の場合—」について 貝瀬 拓也
  - 劉亮雅氏「周縁からの声—戒厳令解除後の台湾セクシュアル・マイノリティ文学」について 小池 珠実
- 第2回中国文学談話会 5月8日 [卒業論文構想発表会]

- 李白の飲酒詩における対酌と人間関係について 木村 崇志
- 『紅樓夢』林黛玉・薛宝釵と花との関わり 菅 悠理子
- 魯迅の『故郷』における希望の解釈について 貝瀬 拓也

- 邱妙津『鱷魚手記』における表現の研究 小池 珠実
- 第3回中国文学談話会 10月19日 [卒業論文中間発表会]

- 李白詩における飲酒と人間関係について 木村 崇志
- 『紅樓夢』林黛玉・薛宝釵と花との関わり 菅 悠理子
- 魯迅(故郷)における「希望」の解釈について 貝瀬 拓也

- 邱妙津『鱷魚手記』における叙述表現について 小池 珠実  
(田島 花野 記)

## 筑波中国学会

○例会

5月21日(木)

- 劉禹錫「秋詞二首」初考 荒川 悠

5月28日(木)

- 趙次公「和蘇詩」補考 王 連旺

6月11日(木)

- 陶淵明「擬古」詩其二再考—「問君今何行、非商復非戎」について 宇賀神秀一

10月22日(木)

- 劉禹錫「烏衣巷」初考 荒川 悠

11月19日(木)

- 賀「感諷五首」論—自己認識の変容とその契機 小田 健太

12月3日(木)

- 想像と真実—論蘇軾「虔州八境図八首並引」 王 連旺

12月10日(木)

- 『陶淵明集』の「四八目」をめぐって—その記述体例と資料的価値に関する一試論 宇賀神秀一

○刊行物

『筑波中国文化論叢』第34号(10月)

(稀代麻也子 記)

## 中国文学学会

○大会 6月27日 文教大学越谷キャンパス

- ・ フランソワ・ノエル『中国哲学三論』における靈魂観に関する一考察 竹中 淳
- ・ 陶淵明「擬古」詩小考 宇賀神秀一
- ・ 劉禹錫の「秋詞二首」への新視角 荒川 悠
- ・ 白居易「傲陶潛体」詩について 七戸 音哉
- ・ 市立米沢図書館蔵「増刊校正王狀元集注分類東坡先生詩」残巻考 王 連旺
- ・ 李商隱の文学と仏教 加固理一郎
- ・ 中国の語り物とは何か? 高橋 稔
- ・ 『全経大意』を読む 高橋 均

[シンポジウム]

近世、近代における日中の漢字文化交流について

- ・ 日中近代における新漢語の誕生 阿川 修三
  - ・ 明清代における日本語学習 蔣 垂東
  - ・ 江戸時代後期の中国白話小説の受容 小松 建男
  - ・ 漢文入門—歴史物の学ばれ方 佐藤 一樹
- コーディネーター・司会 阿川 修三

○月例会

3月7日 大妻女子大学

- ・ 清初の書法指南書について 高橋 佑太
- ・ 元結の新題楽府をめぐる 加藤 敏

5月9日 大妻女子大学

- ・ 王漁洋の「悼亡詩十二首」について 荒井 礼
- ・ 庾信から趙王へ—「周趙王集」の全体像と価値 安藤 信廣

12月5日 大妻女子大学

- ・ 陳子昂「感遇」詩試論—「黄雀」「中山」の寓意性 加藤 文彬
  - ・ 嵇康の「家誡」と「釈私論」と—「中人」の志をめぐる 大上 正美
- (内山 直樹 記)

## お茶の水女子大学中国文学会

○大会 4月25日(土)

- ・ お茶の水女子大学「基礎中国語テキスト」について 伊藤さとみ・馮曰珍・曹泰和
- ・ 書く行為、読む行為 宮尾 正樹

○例会

7月例会 7月4日(土)

- ・ 敦煌写本『葉浄能詩』について—説話の構造を巡って 森田さくら
- ・ 葉聖陶と韓寒の心理表現の比較—方向補語「上」の用法に着目して— 石井 洋美
- ・ 中国伝統演劇を鑑賞して—崑劇を中心に 舟部 淑子

9月例会 9月5日(土)

- ・ 魚玄機の詩に関する一考察—詩作の原点と創造— 横田むつみ
- ・ 介詞“為”“為了”“為着”の意味について 戸沼 市子
- ・ 張愛玲の作品における「正面人物」について 朱 珊

12月例会 12月12日(土)

- ・ 語学研修実施報告 馮曰珍・曹泰和・伊藤美重子・宮尾正樹
  - ・ 語篇銜接視角下的漢日零形回指對比—基本兩篇小説的分析 譚 昕
  - ・ 葉石濤と『台湾男子簡阿淘』—歴史を記憶するという事 迫田 博子
- (竹野 洋子 記)

## 六朝学術学会

○例会

第30回研究例会 3月14日(土) 於東北大学

- ・ 六朝人の論法—否定辞に着目して 塚本 信也
- ・ 台湾布袋戲における三国志脚本について 福山 泰男
- ・ 南朝公主の婚姻 川合 安

第31回研究例会 12月19日(土) 於福岡大学

- ・ 干宝『搜神記』における山川記事について 雁木 誠
- ・ 潘岳「笙賦」をめぐる 上原 尉暢
- ・ 李白の「静夜思」は秋の詩か? 松浦 崇

○大会

第19回大会 6月20日(土) 於二松学舎大学

- ・ 六朝期の賦の評価より見る『文選』賦類の編纂について 栗山 雅央
- ・ 甄琛から見る北魏という時代 池田 恭哉
- ・ 劉宋の七夕詩について 渡邊 登紀
- ・ 庾信以前、庾信以後—庾信の碑文を中心に— 道坂 昭廣

[記念講演]

・六朝道教と仏教 東洋大学教授 山田 利明

○刊行物

『六朝学術学会報』第16集(3月)

(大村 和人 記)

中唐文学会

○第26回大会 10月9日(金) 於亜細亜大学

・『張承古文集』巻一の「題山水障子」詩三首から一王維の画の印象として一 白石 尚史

・顧陶『唐詩類選』について 富 嘉吟

[講演]

・中国の詩跡研究三話一楓橋・寒山寺、敬亭山、鶴雀楼一 弘前大学名誉教授 植木 久行

○刊行物

『中唐文学会報』第22号

(大山 岩根 記)

日本宋代文学学会

○第二回大会 5月30日(土)

東洋大学白山キャンパス2号館16階スカイホール

○シンポジウムI「版本時代のエディター—詩人・親族・書肆—」 司会 内山 精也

・宋人詩集の生前刊行について—士大夫と江湖詩人の異同が意味すること— 内山 精也

・《家世舊聞》版本補議 張 劍

・從《學吟珍珠囊》到《詩學大成》、《圓機活法》—對一種詩學啓蒙書籍源流的考察— 張 健

○発表

・「艾軒学案」から見た江湖派詩人 李 祥

・詩人としての趙次公—その「和蘇詩」を中心にして— 王 連旺

・宋元における『詩経』図解の形成について 原田 信

・宋代古文隆盛の一因—胡瑗『周易口義』の位置— 副島 一郎

・臨安の陸游 西岡 淳

○シンポジウムII「宋代の自然観」 司会 浅見 洋二

・記の文学における自然と人為—中唐期から北宋中期にかけて— 谷口 高志

・歐陽脩の書簡に見られる季節の挨拶をめぐって 東 英寿

・自然・藝術・宗教・自我—略論《石門文字禪》中の景畫詩禪之交融— 周 裕鍇

(坂井多穂子 記)

日本聞一多学会

第19回研究大会 7月18日(土) 東洋大学白山キャンパス

・冥想から恋愛へ—郭沫若の詩作理論について 野村 英登

・近代における漢文小説の還流—依田学海『譚海』と『東海遺聞』の関係を中心に— 楊 爽

・聞一多与古今中外作家比較研究綜論 広東海洋大学教授 李 楽平

[特別講演]

・聞一多 最可宝貴的良知 北京大学教授・中国聞一多学会会長 商 金林

○刊行物

『神話と詩』第14号(2016年3月)

(野村 英登 記)

日本漢詩文学会

第5回例会 3月14日 於 共立女子大学

・小曲演奏 (ピアノ連弾) 戸田和子・戸田幹子

・成島柳北から浅井忠へ—滞欧詩の系譜 齋藤美保子

・新井白石の鬼神論について 松野 敏之

・漢文幼児教育の重要性と展望 戸田 泰行

・本宮三香の漢詩と生涯 中山 正道

・『倉田貞美著作集』の刊行計画について 田山 泰三

第6回例会 9月12日 於 共立女子大学

・謡曲 (独吟) 中嶋 諒

・京都学習院の漢学について 中嶋 諒

・『倅』から見た父・倉田貞美—戦後七十年の今— 倉田 定宣

・江戸期以降の熊本の漢詩人 岩田 一男

○活動

・朱子絶句研究部門 『朱子絶句全訳注』第五冊を刊行(汲古書院、8月)。

その後つづいて『朱文公文集』巻七を輪読中(於早稲田大学・共立女子大学)。

・近代漢詩文研究部門 『倉田貞美著作集』の組版が進行中(明德出版社)。

(松野 敏之 記)

## 国士館大学漢学会

○第50回大会 12月19日

[留学生帰朝報告]

・北京師範大学留学 並木 葵

[研修報告]

・北京師範大学研修報告  
鈴木 絢子・久保庭大輔・山本 理穂

[卒業論文発表]

・『山海経』研究 今津 康宏  
・朱熹の教学研究 戸丸 凌太

[研究発表]

・国士館大学「漢学専攻」創設時の碩学たち  
菊地 誠一

[講演]

・荘子の思想と書について 内村 嘉秀

○第4回詩文朗読コンテスト 12月19日

・課題文 郭沫若「天上の市街」

○刊行物

・『国士館大学漢学紀要』第17号  
(鷲野 正明 記)

## 日本漢文小説研究会

○月例研究会 於湯島聖堂斯文会館

5月31日

・『近世偉人伝』について 内山 知也

10月18日

・日本中国学会・日本漢文部会 報告 小塚 由博  
・『廻瀾集』について 荒井 礼  
(鷲野 正明 記)

## 明清文人研究会

○編集会議ほか

4月29日(水・祝) 湯島聖堂斯文会応接室

・内山知也監修／明清文人研究会編『唐寅』編集会議

6月14日(日) 湯島聖堂斯文会応接室

・内山知也監修／明清文人研究会編『唐寅』編集会議

9月27日(土) 湯島聖堂斯文会応接室

・内山知也監修／明清文人研究会編『唐寅』編集会議

11月8日(日) 東京ガーデンパレス

・内山知也先生卒寿祝賀会&『唐寅』出版記念会

「日本漢文小説研究会」と合同祝賀会

○内山知也監修／明清文人研究会編『唐寅』白帝社

11月15日(日)初版発行

執筆者：内山知也／荒井雄三／荒井礼／有澤晶子／  
河内利治／小塚由博／佐藤敦子／谷口匡／  
村田和弘／鷲野正明

(河内 利治 記)

## 日本詞曲學會

○詞籍「提要」譯注検討會 3月7日、8日

於日本大學商學部

・『四庫全書總目提要』「詞曲類」の譯注および検討

○『唐宋名家詞選』譯注検討會 9月11日～13日

於中京大學文化科學研究所

・龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

○小風絮會(『唐宋名家詞選』譯注)

2月7日、4月25日、6月27日、  
7月25日、10月24日、12月5日

於立命館大學文學部中國文學專攻共同研究室

・龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

○刊行物

『風絮』第12號(12月)

(池田 智幸 記)

## 早稲田大学東洋哲学会

○第32回大会 6月13日(土)

於早稲田大学文学学術院第一会議室

・宋代天台における六即説の展開—六即と理事兩種三千の対応関係をめぐって— 久保田正宏  
・智儼撰『金剛般若経略疏』の思想的位置づけについて 櫻井 唯

・張湛『列子注』の覚夢と神人

富田 絵美

・修養論に見る明清期思想轉換の一樣相—「改過」説と「慎習」説に即して— 原 信太郎アレジャンドレ

・アーラヤ識説導入と禅定の体験との関係について

山部 能宜

[講演]

・『老子』の形而上学と「自然」—北京大学簡に基づいて—  
東京大学名誉教授・山東大学名誉教授 池田 知久

○刊行物

『東洋の思想と宗教』第32号(3月25日)

(江波戸 互 記)

早稲田大学中国文学会

○第40回春季大会 6月20日(土) 文学部第一会議室

・ 単語学習の新しい試み—意味ネットワークによる第二言語学習 若林 ゆりん

・ 中国における「微電影」の勃興と展開 宮崎 壮玄

・ 『紅樓夢』の続書における「金玉姻縁」について 渋井 君也

・ 一九五〇年代台湾言情小説と通俗出版の專業化について 張 文菁

○第40回秋季大会 12月12日(土) 文学部34-151教室

・ 野村篁園を中心とした填詞活動について 陳 竺慧

・ 中国における「弹幕」の展開と影響 楊 駿驍

・ 四字格度数の認定と意義 藤野安紀子

[講演会]

・ 葫蘆・扇・杖棒—一日中の文学空間— 堀 誠

○刊行物

『中国文学研究』第41輯(12月)

(石 ますみ 記)

名古屋大学中国哲学研究会

○研究会

第78回研究会 5月15日

・ 『孝経秘抄』について 石丸 羽菜

第79回研究会 9月14日

[講演]

・ 学び遊んで60年—中国学入門から『西湖夢尋』まで— 名古屋大学名誉教授 佐野 公治

第80回研究会 10月26日

[『名古屋大学中国哲学研究論集』第14号合評会]

(大島絵莉香 記)

・ 小崎智則著「塚田大峰の人間観—『聖道弁物』を中心に—」 田中 千寿

・ 服部寛風著「朱熹の『論語』解釈形成に関する部分的考察」 丹羽 健

○刊行物

『名古屋大学中国哲学論集』第14号(5月25日)

(小崎 智則 記)

名古屋大学中国文学研究室研究会

○中部地区中文交流会 8月1日(土) 於名古屋大学文学部棟

・ 六朝僧侶志怪故事探求 佐野 誠子

[講演]

・ 吟じながら独り行き—郁達夫の名古屋に在りし日々

桜花学園大学教授 高 文軍

・ 中国の書物における日本についての記述

名古屋大学名誉教授 今鷹 眞

○研究談話会

7月16日(木)[卒業論文構想発表]

・ 白居易の寒食詩 梅木 風花

10月8日(木)[卒業論文及び修士論文中間発表]

・ 異類婚姻譚、変身譚から見る中国の動物観

鈴木 詩歩

・ 『三体詩幻雲抄』にみえる五山僧の自然観 岩田 麻愛

11月6日(金)[中国留学報告会]

12月18日(金)[卒業論文構想発表]

・ 嵇康の「家誡」について 加藤 薫

・ 『三国志演義』における「八陣」について 五藤 嵩也

1月29日(金)[卒業論文構想発表]

・ 陸游の雨の詩 中根 彩未

・ 李商隠詩の解釈 長谷川浩平

・ 梅堯臣の悼亡詩と陶淵明の賦 袴田 悠太

2月12日(金)[修士論文最終及び構想発表・研究発表]

・ 『三体詩幻雲抄』にみえる五山僧の自然観 岩田 麻愛

・ 五山僧における王勃「滕王閣序」及び「滕王閣」詩の受容

林 美江

・ 五山における宋代通鑑受容研究の再構築—萬里集九

『帳中香』[宋元通鑑]を中心に 大島絵莉香

○刊行物

『名古屋大学中国語学文学論集』第29輯(12月)

名古屋大学中国文学研究室HP及び名古屋大学学術機関リポジトリにて公開。

大阪大学・名古屋大学中国学研究交流会

○第14回大阪大学・名古屋大学中国学研究交流会

於名古屋大学文学部講義棟127講義室

・ 『三体詩幻雲抄』にみえる五山僧の自然観—「有情」「無情」の語を手がかりに 岩田 麻愛

- ・自由民権の在野儒学者・山本梅崖の『論語私見』について  
矢羽野隆男
- ・善導『観念法門』における念仏表現  
近藤 法雄  
(小崎 智則 記)

## 京都大学中国文学会

○第30回例会 7月18日(土)

- ・鮑照の詩賦における街の描写  
山本 浩史
- ・紹興宣卷と『太平宝巻』—上演・抄本・石印本—  
松家 裕子
- ・枕の上の金詞をめぐる—夢と哀傷の系譜—  
高橋 文治

○講演会 11月20日(金) 於楽友会館

- ・解釋“中國”的困境：從近世歷史看中國的內與外  
復旦大学文史研究院教授 葛 兆光

○刊行物

『中国文学報』第85冊(2014年10月付)  
(木津 祐子 記)

## 中國藝文研究会

○合評會及び研究会

3月1日(日) 於清心館542教室

- ・河清瑞兆説と凶兆説  
谷口 義介
- ・明鈔本『新刊古今歳時雜詠』について  
芳村 弘道
- ・『増續陸放翁詩選』所收「詞十九首」と村瀨栲亭  
萩原 正樹

6月21日(日) 合評會及び研究会 於末川記念會館

- ・『列仙傳』中の仙人像  
宮本 紗代
- ・『全唐詩』中の「かんざし」表現と女性像  
横尾 聰美
- ・『公孫龍子』の認識論と正名思想  
千代延曉子
- ・盛唐の離別詩 公的離別詩と私的離別詩  
田中 京

9月5日(土)研究会 於末川記念會館

- ・『文苑英華』及び校記に於ける『白氏文集』諸本の利用状況  
富 嘉吟
- ・滁州時代の韋應物の境地  
今場 正美
- ・『厲評詞律』について  
萩原 正樹
- ・顧陶『唐詩類選』について  
富 嘉吟

11月28日(土) 國際シンポジウム「漢字文獻の現在」

於創思館一階カンファレンスルーム

- ・北大秦簡祠祝書初探—兼論周家臺“病方簡”的構成  
田 天
- ・經學視角下西漢劉向用《詩》家法考  
張 立克
- ・李斯臂蒼鷹考  
王 亮
- ・五山版『韻鏡』再考—無跋本の定位をめぐる—  
住吉 朋彦

○刊行物

『學林』第60號(3月)

『太平廣記』夢部譯注 今場正美・尾崎裕譯注(5月)

『學林』第61號(11月)

(山内 貴 記)

## 東山之會

○研究發表 於京都女子大學

2月21日

- ・明鈔本の『古今歳時雜詠』について  
芳村 弘道

3月28日

- ・詩序と書簡の間—唐代以前の作品と日本傳存文獻との比較を通して—  
永田 知之

5月16日

- ・庾信「小園賦」考  
二宮美那子

6月20日

- ・初唐四傑の呼称について  
種村由季子

7月25日

- ・李騫「釋情賦」と趙郡の李氏  
土屋 聰

11月28日

- ・難題譚「蟻通し」をめぐる  
岡田 充博

12月19日

- ・韓孟聯句の繼承—歐陽脩・梅堯臣・蘇舜欽を中心に—  
齋藤 茂

○『長江集』譯註(2月22日至月12月13日)

卷二「懷鄭從志」至卷三「送鄒明府遊靈武」

(愛甲 弘志 記)

## 阪神中哲談話会

○400回記念大会 12月6日 於ホテルルピノ京都堀川

- ・中華と夷狄—北魏の民族意識をめぐる雜考—  
池田 恭哉

- 『淮南子』と黄老流行 鈴木 達明  
[記念講演]
- 研究生活を顧みて 加地 伸行  
(橋本 昭典 記)

## 大阪大学中国学会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/xuehui/index.htm>

(事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室)

○国際学術交流 3月7日 於台湾致理技術学院

「国際「漢学」研討会」を東アジア漢学者の会と合同開催した。

- 銀雀山漢墓竹簡「十陣」について 湯浅 邦弘
- 戦国時代における兵家の気の思想と新出土文献 竹田 健二
- 『三略』の思想的特質—儒家思想と「謀」— 梶島 雅弘
- 戦国期における伊尹説話の変成—《呂氏春秋・慎大》及び《清華簡》三篇の比較を通して 青山 大介
- 上博楚簡『陳公冶兵』の基礎的検討 草野 友子
- 清華簡『芮良夫愆』初探 中村 未来
- 神儒の分水嶺—穢れの概念と儒者の態度と— 黒田 秀教
- 明末清初の科挙と考証学 金原 泰介

○刊行物

『中国研究集刊』第60号記念号[称号](6月)

『中国研究集刊』第61号[夜号](12月)

(中村 未来 記)

## 懐徳堂研究会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kaitoku-s/index.html>

(事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室)

○研究会合

第19回研究会 3月27日 大阪大学文学部中庭会議室

- 中井履軒『通語』について 久米 裕子
- 西村天因の五井蘭洲研究と『懐徳堂記録』 竹田 健二
- 『蘭洲遺稿』の他氏批評から見る五井蘭洲の学問観 佐藤 由隆
- 五井蘭洲『非伊編』について 寺門日出男

第20回研究会 6月6日 大阪大学文学部中庭会議室

- 五井蘭洲「中庸天命性凶」の復元を試みる 湯城 吉信
- 儒者のやまごころ—中華論より萬世一系論へ— 黒田 秀教

- 板木のデジタルアーカイブ—韓国所蔵の板木と懐徳堂文庫所蔵の板木— 湯浅 邦弘
- 西村天因の楚辞研究—「日本楚辞学の基礎的研究」の一環として— 矢羽野隆男

第21回研究会 8月22日 大阪大学文学部中庭会議室

- 消された格物致知論—自筆本『質疑篇』と『質疑疑文』— 佐藤 由隆
- 五井蘭洲『非伊編』について(続) 寺門日出男
- 中井竹山・履軒の『尚書』注釈—今古文解釈を中心に— 中村 未来

- 東京大学史料編纂所所蔵の懐徳堂関係資料—中井木菟麻呂関連の八点について— 竹田 健二
- 懐徳堂文庫貴重資料の大阪府文化財指定の可能性について 湯浅 邦弘

第22回研究会 12月6日 大阪大学文学部大会議室

- 蘭洲遺稿は自筆か? 湯城 吉信
- 「天囚書簡」の全体像について 池田 光子
- 「第二次新田文庫」整理事業のための事前調査 池田 光子
- ホームページの開設について 竹田 健二
- 次年度以降の計画について 竹田 健二

○シンポジウム

「梅花女子大学所蔵中井終子日記を通して探る懐徳堂研究と女子教育の揺籃期」 12月5日

(梅花女子大学・凸版印刷株式会社と合同開催)

[講演]

- 懐徳堂顕彰運動と中井木菟麻呂 竹田 健二
- 明治初期の女子教育—梅花女学校の場合— 梅花女子大学学長 長澤 修一
- 中井終子日記資料デジタルコンテンツ紹介 凸版印刷株式会社 末吉 敬子  
高根大学教育学部教授 竹田 健二

○デジタルアーカイブ

- 科研費基盤研究B「懐徳堂の総合的研究」(研究代表者: 竹田健二)の一環として、2月に懐徳堂文庫所蔵『論語聞書』を、11月に『懐徳堂考下巻』をデジタルアーカイブ化し、WEB懐徳堂(<http://kaitokudo.jp/>)での公開を開始した。

(中村 未来 記)

## 中国出土文献研究会

http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/sokankenkyukai/index.html

(事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室)

### ○研究会合

第57回研究会 7月4日、5日 大阪大学中国哲学資料室

- ・『戦国策』関連研究札記 清水 洋子
- ・清華簡『封許之命』釈読 草野 友子
- ・清華簡『命訓』について 中村 未来
- ・清華簡『湯處於湯丘』釈読 福田 一也
- ・清華簡『湯處於湯丘』所見伊尹「割烹」故事初探 曹 方向

- ・清華簡『湯在啻門』釈読 竹田 健二

第58回研究会 9月5日 北京大学出土文献研究所

- ・清華簡『封許之命』解題 草野 友子
- ・清華簡『湯在啻門』解題 竹田 健二
- ・清華簡『厚父』の時代及び性質 福田 哲之
- ・清華簡『殷高宗問於三壽』釈読 湯浅 邦弘

第59回研究会 9月22日 大阪大学中国哲学資料室

- ・清華簡『厚父』解題 福田 哲之
- ・清華簡『封許之命』解題(修訂版) 草野 友子
- ・清華簡『命訓』解題 中村 未来
- ・清華簡『湯處於湯丘』解題 福田 一也
- ・清華簡『湯在啻門』解題(修訂版) 竹田 健二
- ・清華簡『殷高宗問於三壽』解題 湯浅 邦弘
- ・清華簡『湯處於湯丘』所見伊尹「割烹」故事初探(修訂版) 曹 方向

- ・清華簡『厚父』の時代及びその性質 福田 哲之
- ・清華簡『湯在啻門』における「氣」について 竹田 健二

第60回研究会 11月22日 大阪大学中国哲学資料室

- ・武漢大学徐少華先生を囲む座談会

第61回研究会・特別講演会

12月19日 大阪大学文学部中庭会議室

- ・荀子思想の現代のおよび時代的意義とその研究の課題 佐藤 將之
- ・戦国文字と伝世文献に見える「文字異形」について 曹 方向

第62回研究会 12月20日 大阪大学中国哲学資料室

- ・清華簡『湯處於湯丘』の伊尹故事について 福田 一也
- ・清華簡五『湯在啻門』に見える「玉種」について 曹 方向
- ・清華簡『殷高宗問於三壽』の思想的特質 湯浅 邦弘

### ○国際学術交流

5月9日「東アジア文化交渉学会・第7回年次大会」

於神奈川県開成町福祉会館

- ・上博楚簡『陳公冶兵』の文献的性格 草野 友子
- ・清華簡『芮良夫毖』の基礎的考察 中村 未来
- ・上博簡『君人者何必安哉』再研究 曹 方向

9月6日

湯浅邦弘・福田哲之・竹田健二・草野友子・中村未来・曹方向が中国国家図書館を訪問し、副館長と会談。館内貴重資料を参観した。また同日午後、北京大学博物館にて、北大漢簡・秦簡牘を実見し、朱鳳翰・李零・陳侃理氏らと会談した。

9月7日

湯浅邦弘・福田哲之・竹田健二・草野友子・中村未来・曹方向が同方知網(北京)技術有限公司を訪問し、データベース制作作業を参観。その後、会議室にて、大規模データベース化プロジェクトについて会談した。同日午後、清華大学にて清華簡を実見し、清華簡整理者の先生方と討論会を行った。

10月3日～4日 「先秦經典字義源流」国際学術研討會

於香港浸会大学

- ・「主」與「客」—以兵家和道家爲中心— 湯浅 邦弘

10月17日～18日

「先秦兩漢出土文獻與學術新視野」国際学術研討會

於台湾大学

- ・清華簡『厚父』的時代暨其特性 福田 哲之
- ・清華簡『湯在啻門』的「氣」 竹田 健二
- ・清華簡『殷高宗問於三壽』的思想特色 湯浅 邦弘  
(中村 未来 記)

## 中国四国地区中国学会

○第61回大会 6月13日(土) 岡山大学創立50周年記念館

- ・『公孫竜子』に見る諸思惟 溝本 章治
- ・『易緯乾鑿度』上下巻に付された鄭玄注の真偽 藤田 衛
- ・「代悲白頭翁」詩の「桑田變成海」句について 土屋 聡

- ・死者を悼む—白居易の青春・続 橘 英範
- ・柳永の遊仙詞 藤原 祐子
- ・洪邁『夷堅志』における致富譚について 本間 貴博
- ・竹久夢二と豊子愷：ホイッスラー、竹久夢二、豊子愷を繋ぐ“橋の絵” 木村 泰枝

[講演]

- ・日中国交正常化と通信事業の再開  
京都大学地域研究統合情報センター 貴志 俊彦  
(橋 英範 記)

広島大学中国思想文化学研究室研究会

○第194回研究会 2月10日

[卒業論文発表会]

- ・西晉一郎「國體」論の基礎的研究—「忠孝」思想に着目して— 周藤 忠明
- ・古代中国における追儻とその変遷 藤村 知代

[修士論文発表会]

- ・荘子の思想について—「一」の思想から— 秋葉不比等

○第195回研究会 10月29日

[卒業論文中間発表会]

- ・観の二面性について—『淮南子』と『左伝』を中心に— 有川久美子

- ・班氏からみた王莽 笹山 陽右
- ・王充『論衡』における「道家」について 槇野晃太郎
- ・朱子『小学』研究 森 泰平

[修士論文中間発表会]

- ・楊万里 心学思想の研究 望月 勇希
- ・中日孟蘭盆会の比較—本地の宗教信仰との融合を中心に— 李 金芳

[卒業論文テーマ発表会]

- ・室鳩巢から見る日本朱子学 太田 若葉

○刊行物(発行人 東洋古典學研究会)

『東洋古典學研究』第39集(5月)

『東洋古典學研究』第40集(10月)

(有馬 卓也 記)

広島大学中国文学研究室研究会

○第187回 1月30日 [修士論文最終発表会]

- ・王羲之の評価の変遷について 志田 乙絵
- ・欧陽脩研究—花譜・日記・金石学・隨筆を中心として— 渡部 雄之

○第188回 2月13日 [卒業論文最終発表会]

- ・容与堂本『水滸伝』における李卓吾批評の意義について 橋本 夏樹

- ・中国語の不定数「三五」「四五」「三四」の違いについて— 『水滸伝』を中心として— 吉野 茜

○第189回 6月8日

- ・洪邁『夷堅志』における致富譚について 本間 貴博

○第190回 6月29日 [修士論文最終発表会]

- ・遠山荷塘と『諺解校注古本西廂記』研究 樊 可人
- ・『現代漢語描写語法』について 小山佐和子

[修士論文中間発表会]

- ・六朝「舞詩」研究—文学表現を中心として—

胡 兮

○第191回 7月24日 [卒業論文構想発表会]

- ・『金瓶梅』における女性の容姿の描写—孟玉楼を中心として— 河田 結衣
- ・元稹の「月」の詩 賈 雲飛

○第192回 11月27日 [卒業論文中間発表会]

- ・『金瓶梅』における女性描写—容姿の表現を中心として—

河田 結衣

- ・元稹の「涉月」詩の三パターン 賈 雲飛

○第193回 12月18日 [修士論文構想発表会]

- ・容与堂本『水滸伝』に付された一文字の批評について 橋本 夏樹

- ・月の詩情—菅原道真における『文選』李善注の受容—

黄 柏宗  
(川島 優子 記)

中国中世文学会

○平成27年度研究大会 11月7日

於広島大学東千田キャンパス

- ・古文家の「怪」と欧陽脩の批判—石介との往復書簡を中心に— 渡部 雄之

- ・仏教信仰に捧げる絶唱—七十卷本白氏文集の成立経緯をめぐって— 陳 翀

- ・乾隆前期の杭州詩壇と詩人周京 市瀬 信子

- ・遠山荷塘の『諺解校注古本西廂記』 樊 可人

[講演]

- ・『香山九老図』与「九老図詩」関係考—關於「九老図詩」之疑問与『白氏文集』在宋代的流伝— 查 屏球

○例会 於広島大学文学研究科

4月16日

- ・宋代における致富譚の特徴について 本間 貴博

5月7日

- ・平安時代における李白詩の受容—菅原道真への影響の可能性— 黄 柏宗

5月14日

- ・『現代中国語記述文法』について—訳出にあたって不明瞭さを持つ部分の考察— 小山佐和子
- ・『夷堅志』の致富譚について 本間 貴博

10月22日

- ・古文家の「怪」と欧陽脩の批判—石介との往復書簡を中心に— 渡部 雄之
- ・遠山荷塘の『諺解校注古本西廂記』 樊 可人

11月12日

- ・六朝「舞詩」における鳥の比喻表現の変遷—仕草の要素を中心として— 胡 兮
- ・梅堯臣詩研究—許昌期の詩を中心に— 大井 さき

11月26日

- ・文学視域における白川静の詩経学 何 玲玲
- ・容与堂本『水滸伝』に付された一文字の評語について 橋本 夏樹

12月17日

- ・『醉翁談録』のテキストについて 孟 夏
- ・六朝「舞詩」における対句表現の変遷 胡 兮

○刊行物

『中国中世文学研究』第65号

『中国中世文学研究』第66号

(川島 優子 記)

## 山口中国学会

○例会 7月4日(土)

於山口大学人文学部2号館第5講義室

- ・戊戌変法前の梁啓超の民権論について—湖南時務学堂時期を中心に 于 海英
- ・明治時代における中国語受容の実態—日本人が編纂した最初の中国語辞典『四声標註支那官話字典』をめぐる 王 雪

○大会 12月19日(土)

於山口大学人文学部2号館第5講義室

- ・前漢末から後漢末における侍子について 中村 桃子
- ・『井上支那語字典』について 王 雪
- ・『清議報』時期における梁啓超の民権論 于 海英

(根ヶ山 徹 記)

## 九州中国学会

○平成27年度(第63回)大会 於九州大学伊都キャンパス  
第一日(5月16日)

- ・黄庭堅の挽詞について 蒙 顕鵬
- ・清華簡『赤牘之集湯之屋』と戦国期楚の巫術的風習 横山 慎悟
- ・明末浙東文人銭文薦とその詩文集『麗陽樓集』について 邵 劼
- ・日本伝存の旧鈔本『史記』の文献的価値について 李 由
- ・従西域之神到東土隱士—唐宋維摩詰図題詩之衍変— 查 屏球

[講演]

- ・五山文学における詩集の編成について 堀川 貴司
- ・文人伝統と近代美術—二〇世紀初頭の厦門と台湾出身画家たちの交流を中心に— 羽田ジュシカ
- ・漢語における「左右」の特異性と、元曲元刊本中の用例との関連性 宮下 尚子
- ・『五行大義』でよむ『竹取物語』求婚難題譚の構成 福永 美佳
- ・顧頡剛の尚書研究の方法と経緯に関する考察 竹元 規人
- ・憤歎からみた法家思想の展開について—『韓非子』孤憤篇と『潜夫論』潜歎篇を中心に— 横山 裕

○刊行物

『九州中国学会報』第53巻(5月)

(中里見 敬 記)

## 九州大学中国文学会

○中国文藝座談会

第278回 1月31日

- ・黄庭堅の挽詞について 蒙 顕鵬
- ・馮夢龍の号「墨憨齋」について 山口 綾子
- ・魯迅とキリスト教影響下のロシア「同伴者」作家たち 陳 維

第279回 3月7日

- ・初唐詩人群と山東 種村由季子
- ・「持衡擁璇」について 何 中夏
- ・青木正児と琉璃廠来薰閣について 稲森 雅子



- ・ 明末浙東文人錢文薦とその詩文集『麗囑樓集』について  
邵 劫
- 第280回 4月25日
- ・ 元稹「幽棲」詩における「野人」 長谷川真史
- ・ 宋代の葬礼と挽詞の関係について—司馬光挽詞を中心に—  
蒙 顯鵬
- ・ 『文選』の編纂と辞賦の変容 栗山 雅央
- ・ 日本伝存の旧抄本『史記』の文献的価値について  
李 由
- 第281回 5月28日
- ・ 旧鈔本校勘と文学研究—以『白氏文集』為例—  
静永 健
- ・ 「香山居士図」と「香山九老図」之關係考弁  
查 屏球
- ・ 有閑班固的“賦”觀—以「兩都賦・序」的解釈為中心—  
栗山 雅央
- ・ 帰隱之前陶淵明—以陶氏与桓玄之關係為中心  
復旦大学中文系 陳 引馳
- 第282回 7月18日
- ・ 『搜神記』にみえる山岳 雁木 誠
- ・ 艾軒学派林光朝について 李 祥
- ・ 「元代文学」は成り立つか—王朝交替と文学史—  
奥野新太郎
- ・ 外務省文化事業部第三種補給生・濱一衛—外務省資料  
と周豊一の回想録でたどる留学生活— 中里見 敬
- 第283回 9月19日
- ・ 『封神演義』の登場人物 殷郊・殷洪について  
岩崎華奈子
- ・ 文人空海の成立考 ウィリアム・マツダ
- 第284回 11月14日
- ・ 錢文薦の辞賦について 邵 劫
- ・ 孫楷第『中国通俗小説書目』編纂と当時の日中学術交流  
稲森 雅子
- ・ 近十五年来の『搜神記』研究について 雁木 誠
- 刊行物  
『中国文学論集』第44号(岡村繁先生追悼号)  
(奥野新太郎 記)

## ❖ 委員会報告

### 論文審査委員会

委員長 大木 康

#### ○学会報第68集応募論文の審査の経緯

2016年1月20日(消印有効)締め切りの応募論文は全43篇(哲学・思想部門9篇、文学・語学部門27篇、日本漢学部門7篇)であった。1月30日に論文審査委員会を開催し、論文1篇につき3名の査読委員(論文審査委員会委員1名を含む)を決めた。

3月27日開催の論文審査委員会で、査読委員3名の査読結果をもとに、哲学・思想部門1篇、文学・語学部門9篇、日本漢学部門1篇の計11篇の掲載を決めた。

#### ○その他、3月27日の論文審査委員会での審議決定事項

- ・学会報第69集依頼論文執筆候補者を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・哲学・思想部門から1名、文学語学部門から1名の学会賞候補者を決定し、理事会に推薦することとした。あわせて、受賞理由執筆者を決めた。
- ・平成28年度日本学術振興会奨励賞推薦者については見送ることとし、理事会に報告することとした。

投稿論文のなかに、執筆要領の規定に著しく違反した論文が見られた。第69集以降に論文を投稿されるみなさまには、執筆要領の遵守を徹底していただきたい。

『日本中国學會報』掲載論文における注釈の表記の統一をはかるため、ガイドライン(案)が定められた。今回は、掲載論文執筆者に、後から改訂をお願いすることになったが、第69集以降の投稿者におかれては、ガイドラインに沿う形で論文を執筆していただきたい。

「論文執筆要領」の枚数規定を、原稿用紙に基づいた数え方からワープロ入力に基づいた数え方に改訂すべく、検討中である。第69集投稿予定者は、執筆要領改訂の可能性があるので、ご注意いただきたい。

なお、第69集より、締め切りが「1月15日(消印有効)」にかかわることにも、ご注意いただきたい。

### 選挙管理委員会

委員長 松原 朗

#### 1. 評議員の一部交替

平成27年(2015年)12月1日に評議員1名が逝去されたため、平成26年に実施された評議員選挙の結果に基づき1名の会員が繰り上げ当選となった。任期は平成27年12月25日から平成29年3月31日まで。

- 逝去された評議員 大島 晃 会員
- 後任の評議員 上田 望 会員

#### 2. 平成29・30年度役員選挙

本年度(平成28年度)は役員選挙の年となる。その皮切りとしてまず本年6月4日(土)に評議員選挙の選挙用紙の発送作業を行う予定である。ふるって投票されることをお願いしたい。



## ❖ 事務局より

### 出版委員会

委員長 釜谷 武志

#### ○【緊急】学界展望メールアドレス変更のお知らせ

「日本中国学会便り」2015年第2号で、学界展望文献目録作成のための資料提供をお願いしましたが、その後、技術上の問題で、学界展望報告用のメールアドレスのうち2つ(哲学部門と語学部門)が使用できないことが判明しました。

すでに報告して下さった会員には、二度手間になって恐縮ですが、再度、下記のアドレスあてに報告して下さるようお願い申し上げます。なお、文学部門のアドレスは変更ありませんので再度お送りいただくには及びません。

『日本中国学会報』第68集(2016年10月刊行予定)掲載の「学界展望」の基礎資料として、2015年の文献目録を作成します。2015年1月～12月に刊行された著書・雑誌論文等をお知らせください。

論文も著書も一篇、一冊ごとに部門・分野をご記入の上、以下の該当部門の担当者にお送り下さい。

変更後のアドレスは以下のとおりです。

〔哲学部門〕 湯浅 邦弘 会員(大阪大学)

電子メール：[yuusa@let.osaka-u.ac.jp](mailto:yuusa@let.osaka-u.ac.jp)

〔文学部門〕 釜谷 武志 会員(神戸大学)

電子メール：[nihonchugoku.bungaku@gmail.com](mailto:nihonchugoku.bungaku@gmail.com)

(変更なし)

〔語学部門〕 森賀 一恵 会員(富山大学)

電子メール：[moriga@hmt.u-toyama.ac.jp](mailto:moriga@hmt.u-toyama.ac.jp)

#### ◎住所等の変更と会員名簿への掲載について

住所や所属機関の変更につきましては、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。メール、郵便、ファックス、あるいは会費納入時の振込用紙(ゆうちょ銀行払込取扱票)通信欄をご利用ください。

今年度10月発行の会員名簿には、8月末日までにお知らせいただいた会員情報を掲載いたします。それ以降の変更については次年度の掲載となりますので、ご了承ください。なお、以前は固定電話の番号(自宅または勤務先)のみを掲載しておりましたが、2013年度から携帯電話の番号も掲載できることといたしました。携帯番号を掲載することを希望される場合は、事務局までご一報願います(ご本人からのお申し出がない限り、既にご登録いただいている携帯番号を掲載することはありません)。

#### 日本中国学会事務局

メール：[info@nippon-chugoku-gakkai.org](mailto:info@nippon-chugoku-gakkai.org)

郵便：〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

斯文会館内

ファックス：03-3251-4853

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：00160-9-89927

加入者名：日本中国学会

#### 訃報

『学会便り』昨年度第2号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。  
(敬称略)

刈部 良吉	(関東地区)	2015年9月15日
一海 知義	(近畿地区)	2015年11月15日
大島 晃	(関東地区)	2015年12月1日
上田 武	(中部地区)	2016年2月5日

## 第68回大会開催のお知らせと研究発表の募集

会員各位

陽春の候、会員各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第68回大会は奈良女子大学が準備を担当し、本年10月8日(土)、9(日)の両日に奈良女子大学にて開催することになりました。

つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、奮ってご応募くださいますようお願い申し上げます。

2016年4月吉日

日本中国学会第68回大会準備会代表

野村 鮎子

記

1. 部会 : 一、哲学・思想  
二、文学・語学  
三、日本漢文(日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など)
2. 時間 : 発表 20分 質疑応答 10分
3. 締め切り : 6月30日(木)(当日消印有効)
4. 応募 : 研究発表は、学術研究の最新の成果で、未公開のものに限ります。応募される方は、氏名(フリガナ・所属)・希望発表部会・連絡先メールアドレスを明記の上、発表題目および概要(800字以内)を、大会準備会まで郵送してください。なお、発表題目および概要については、その電子ファイルをEメール(データ添付)により期日までに送付してください。  
※執筆者による校正はありませんので、完全原稿をお願いします。
5. 郵送宛先 : 〒630-8506 奈良市北魚屋西町  
奈良女子大学文学部内  
日本中国学会第68回大会準備会代表 野村 鮎子 宛  
E-mail: zhongwen@cc.nara-wu.ac.jp

◎本年は、一、哲学・思想 二、文学・語学 三、日本漢文の三部会を予定しておりますが、応募状況によって調整することも考えております。また、応募者多数の場合は、やむを得ずご発表をお断りすることもございますので、ご了承ください。

◎次世代シンポジウムとその開催方式については、5月の理事会で決定されます。大会時に開催することになりましたら、あらためて詳細を通知いたします。

◎大会は観光シーズンにあたるため、宿泊施設の確保が難しくなります。早目のご予約をお願いします。

◎大会当日、学内に託児室(生後3か月～小6対象)を開設します。詳細につきましては、大会要項に記載する予定です。

【問合せ先】 E-mail: zhongwen@cc.nara-wu.ac.jp (大会準備会事務局)

TEL: 0742-20-3977(野村)